

## 第Ⅲ章 山王塚古墳をめぐる諸問題

### 第1節 古代社会と山王塚古墳

#### (1) 山王塚古墳と武蔵の終末期古墳

小久保徹（元埼玉県立さきたま資料館副館長）

山王塚古墳は日本最大の上円下方墳である。発掘調査で上円下方墳と確認されたものは全国でも当該古墳を含めわずか6例で極めて少ない。規模は円丘を乗せる下方部の辺長69m、上円部径37m、幅15mの周堀が巡り、その外周までを墓所の区域である兆域とすれば東西80m、南北90mにも及ぶ。他例では下方部辺長は10数m、大きいものでも30mほどなので上円下方墳のなかでは突出した規模の巨大古墳といえる。

山王塚古墳は7世紀後半の終末期古墳である。前方後円墳の造営停止以降から古墳が作られなくなるまで古墳の時期区分として終末期古墳の呼称が広く使われ、7世紀代の年代が当てられている。山王塚古墳は終末期古墳の後半にあたり、400年間続いた古墳造営の終焉と深く関わる時期である。ここでは山王塚古墳について、地域の古墳造営においてその在り方の特徴を挙げ、それらとの関連に基づいて他地域の終末期古墳の在り方と比較する。

山王塚古墳は南大塚古墳群に属する。27基ほどが確認されているが5世紀代の円墳から始まり6世紀の円墳、前方後円墳、7世紀の終末期古墳では円墳、40m級大形円墳（山王塚西古墳）、そして巨大上円下方墳（山王塚古墳）が造営されるという構成である。終末期古墳はほとんどが群集小円墳であるが、これらとはやや離れて大形墳群として7世紀前半の山王塚西古墳が7世紀後半の山王塚古墳に接するように2基並んで造られている。この2古墳は古墳が群集する地域から400m程離れて立地している。

山王塚古墳はその規模から地域支配の頂点に立つ人物の墓と考えられ、豊富な装身具や銀象眼六窓鏝などを副葬品としてもつ山王塚西古墳はこの人物の直前の首長墓と考えられる。次代の首長は先代に倣わず円墳や方墳ではない、そして先代とは隔絶した規模をもつ上円下方墳を造ったといえる。埋葬施設はどちらも横穴式石室であるが今まで全くなかった新しい様式の墳墓形式を取り入れたのである。

山王塚古墳の石室石材は群馬県の榛名山二ツ岳噴出物に由来する角閃石安山岩であった。この石材は浮石質で河流によってかなり広汎に流下分布し、群馬県下の利根川流域の古墳の横穴式石室に広く使われているが埼玉県内の利根川流域の古墳にも類例がある。山王塚古墳の直近では直線距離で20kmほど北方の鴻巣市箕田9号墳（宮登古墳）があるが現荒川下流域では山王塚古墳はその南限にあたる。石材をどこから運んだかは不明であるが直近の現利根川とは直線距離では30km以上ある。

緑泥片岩の長方形大形板石が2枚、床面に転落した状態で発見され、石室側壁両側に仕切りとして立てられていた門柱石と推測できるがこの石材も近くでは採れず、直近の産地と思われる地とは直線距離では20kmほどある。いずれもかなりの遠隔地から石室石材を運んでいるという特徴を持つ。

南大塚古墳群では横穴式石室の石材はすべて近辺の入間川に産する川原石で角閃石安山岩使用例はない。山王塚古墳直前に造営された山王塚西古墳の横穴式石室も川原石であった。緑泥片岩の使用例も古墳群内にはほかに見あたらない。山王塚古墳の石材利用が南大塚古墳群内の他の横穴式石室と大きく違うのは川原石をそのまま使うのではなく、石材を加工する工程が入っていることである。角閃石安山岩は転石ゆえに残る曲面を上下左右とも削って加工し、堅牢に積み上がるようにしていた。直方体状の切石ではなく、自然面を一部残す削石技法であるのが特徴である。

山王塚古墳では旧地表面を 50cm 程度掘り下げ、ローム土を 180cm 積んだ上に石室を構築している。ごく一部のテストピット調査なので 180cm の積み土が、墳丘盛土と一体なのか、あるいは墳丘盛土を新たに掘り込んだ中に積んだものなのか、または石室部分だけを基壇状に積み上げたものなのか不明である。しかしながら石室構築に先立ってしっかりと基礎地盤を整備するというのは他例で確認されている掘り込み地業と軌を一にするものであろう。掘り込み地業とは石室構築に先立ち、あらかじめ地面を掘り下げた後、下から性質の異なる土を何層にも水平に敲き締めながら積み上げ(版築)、基礎地盤とするものである。朝鮮半島から寺院建築技法として伝わり、飛鳥寺造営が開始された崇峻元年(588)以後行われた技法である。山王塚古墳と比較検討する上で極めて重要と思われる武蔵府中熊野神社古墳は典型的な上円下方墳で定型的な掘り込み地業を施している。山王塚古墳の石室構築技法の詳細は不明ながら寺院建築技法を取り入れている事は間違いなかろう。南大塚古墳群ではこのような技法をもたないので山王塚古墳は前代には無い全く新しい様式の技法を取り入れて出現しているといえよう。

南大塚古墳群の終末期古墳群中における山王塚古墳の在り方を概観すると、群からやや離れた立地、墳丘形態、墳丘および石室構築技法において前代と一線を画した新様式を取り入れた古墳として、そして隔絶した規模をもって現れてくるのが特色といえる。このような在り方をキーワードとして他地域の終末期古墳を取り上げ、山王塚古墳を考える上で関わりがありそうなものには以下の終末期古墳がある。

#### ① 行田市八幡山古墳

墳丘はすでに無く、倒壊した石室石材だけであったのを復元整備している。大形の角閃石安山岩切石、緑泥片岩の巨石を使用した横穴式石室の全長は 16.7m。奥室(玄室)、中室、前室に羨道が付く 3 室構造の巨大石室である。直径 80m の円墳と推定されている。

掘り込み地業では無く数段の根石を積み上げ、その内部を版築で敲き締めながら盛り上げて石室床面とするなど他例にはない技法を有する。

#### ② 行田市戸場口山古墳

埼玉古墳群内にある最も新しい古墳で 1 辺 40m の大形方墳である。墳丘はすでに削平されているが 2 重の堀が確認され外堀を含めると 80m になる。大形前方後円墳が継続的に造られ、その最終時期の前方後円墳である中の山古墳に継続して 7 世紀前半に戸場口山古墳が造営されている。次代首長墓が前代首長墓と接して造営されているのは山王塚古墳と山王塚西古墳との関係と全く同じである。終末期古墳の在り方の類型かどうかは不明である。

#### ③ 小川町穴八幡古墳

1 辺 30m の墳丘をもち 2 重の周溝(堀)が巡る。外堀を含めると 80m になる大形方墳である。

石室下部は掘り込み地業を施し、丁寧な版築により基盤整備されている。石室、墳丘ともに良く整った古墳で内周溝（堀）の外周規模が山王塚古墳の墳丘規模と類似する。周辺に古墳は全く見当たらず単独立地である。

#### ④ 坂戸市新山 2 号墳

墳丘がわずかに残る小円墳とされていたが発掘調査の結果、約 50m の方墳であることがわかった。10m 内外の終末期古墳群の中にあって隔絶した規模をもち、これら位置とはやや離れて立地しているのは山王塚古墳の在り方と似る。

#### ⑤ 鶴ヶ島市鶴ヶ丘稻荷神社古墳

掘り込み地業は武蔵府中熊野神社古墳と同じく定型化したものである。墳形は方形に巡る堀により方墳とされるが墳丘は後世の畑作による変形がある。近くに全く同じ掘り込み地業を施す鶴ヶ丘 1 号墳がある。墳丘はほとんど無く石室の一部のみ残存していたが鶴ヶ丘稲荷神社古墳と同じく堀と裾部との間に広い空間が想定される。これら 2 古墳の墳丘は円形になる可能性もあり、墳形、古墳造営技法の系譜を考える上で武蔵府中熊野神社古墳、山王塚古墳と何らかの関連が想定される。

#### ⑥ 府中市武蔵府中熊野神社古墳

山王塚古墳と同じ上円下方墳であるが全面が葺石、貼石で覆われるなど形態はかなり異なる。しかし下方部の辺長は山王塚古墳の上円部径とほぼ同じで周辺の部分調査で 90m 程度の規模である可能性が指摘されている（山王塚古墳は東西 80m 南北 90m）。

山王塚古墳と武蔵府中熊野神社古墳は上円下方墳の典型とも言うべき古墳で形状はすべて定型化した要素をもつと考えられる故に両者の同異点はそのまま上円下方墳の性格の差を特徴的に表すと共に、同じように被葬者あるいは古墳造営を主宰した人物の社会的地位の差をも特徴的に表すと考えられる。終末期古墳後半に属するので古墳時代の終焉を示す地域の終焉古墳として位置づける事も可能でその場合は終末期の大形古墳の性格付けとも関わろう。このように措定した上で特に山王塚古墳と武蔵府中熊野神社古墳それぞれの歴史的、地理的環境、古墳築造上の諸要素の比較検討をすることが、武蔵の終末期古墳、古代社会を考える上で重要な課題となると考えられる。

#### ⑦ 三鷹市天文台構内古墳

山王塚古墳と比べるとかなり小形になるが上円下方墳である。周辺に高塚古墳群は無く横穴墓群が密集した地域に立地するが山王塚古墳も東方 2km に岸町横穴墓群が存在する。終末期古墳の在り方について何らかの共通要素があるのか検討課題であろう。

地域の有力者墳墓としての終末期古墳の在り方は円墳、方墳および上円下方墳がある。終末期の群集古墳がほぼ類似した規模の小円墳であるのにくらべ、これら有力者の墳墓は規模の偏差が大きい。古墳の立地、埋葬施設の形態、構築技法も様々で更に横穴墓群との関わりもある。

終末期古墳の時期は群集墳あるいは横穴墓が爆発的に増加する。社会の生産力が飛躍的に高まった時期であるが有力者墳墓の様々な偏差は富と権力の集中度の違いであろう。

山王塚古墳被葬者が生きた時代は、中央にあっては天智朝から壬申の乱を経て天武朝に至る律令制古代国家が整備され、地方支配の枠組みが変貌してゆく時代でもあった。

古墳の在り方も変化し、400 年間続いた古墳造営が終焉する画期でもある。このような歴史状況

にあって、希有な墳形である上円下方墳の形態をとり、日本最大の規模を持つ山王塚古墳は日本古代史を解明する上で学術的に非常に重要である。また 1400 年の長きにわたり上円下方墳としての原型をよくとどめている山王塚古墳をこのまま遺し、保存して後世に伝える事は十分意義あることである。

#### 引用参考文献

- (1) 埼玉県立さきたま資料館 1980『埼玉県指定史跡 八幡山古墳石室復原報告書』
- (2) 利根川章彦 1994「県内主要古墳の調査(Ⅲ)」『調査研究報告第7号』埼玉県立さきたま資料館
- (3) 小川町 1999『小川町の歴史 資料編1 考古』
- (4) 藤野一之 2014「坂戸市新山古墳群(4区)の調査」『第47回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
- (5) 岩瀬譲ほか 1985『鶴ヶ丘(E区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第45集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2005『武蔵府中熊野神社古墳』
- (7) 府中市教育委員会 2013『国史跡 武蔵府中熊野神社古墳保存整備事業報告』
- (8) 塚原二郎 2010「国史跡武蔵府中熊野神社古墳と多摩の古墳」『武蔵野84-1号』
- (9) 三鷹市遺跡調査会・三鷹市教育委員会 2011『天文台構内古墳』  
鈴木嘉吉 1974「寺院一伽藍の構成と配置」『古代史発掘9 埋もれた宮殿と寺』講談社  
小久保徹 2000「終末期の方墳についてー鶴ヶ丘古墳群をめぐってー」『調査研究報告』第13号  
埼玉県立さきたま資料館  
塩野博 2004『埼玉の古墳 北足立・入間』さきたま出版会  
白石太一郎 2005「前方後円墳の終焉」『終末期古墳と古代国家』吉川弘文館